

2017年度教養文化研究所・比較法研究所共催公開シンポジウム報告

教養文化研究所所長 井上久士

日時：2017年11月17日（金） 13:20～14:50

場所：駿河台大学AVホール（7404教室）

メインテーマ：「グローバル時代の異文化交流」

特別講演：「日常を知らずして相手は理解できない—日本文化専門誌を通じた文化交流の試み—」

講演者：毛丹青（マオ タンチン）氏（作家，神戸国際大学教授）

司会：葉紅准教授（講演者紹介者・グローバル教育センター）

コメンテーター：井上久士教授（所長・法学部），長尾建准教授（現代文化学部）

井上 皆さん，こんにちは。今回ははるばる神戸から，毛丹青先生に来ていただきまして，日本の異文化交流，具体的には中国と日本の交流について，メイン報告をいただければと思います。最近多くの中国人観光客が来日していますが，観光と文化交流の関係などを皆さんと一緒に考えていければということでございます。今日のシンポジウムは教養文化研究所と比較法研究所という二つの研究所の共催でございます。それでは，よろしくお祈いします。

司会 井上先生，ありがとうございます。続きまして，本日のコメンテーターならびにゲストスピーカーをご紹介します。皆さんの座席から前に向かって右側は本学の現代文化学部所属の長尾先生です。今日はよろしくお祈いします。そして，ただいまお話をいただきました，法学部所属で教養文化研究所所長の井上先生です。どうぞよろしくお祈いします。

続きまして，本日の特別講演をしてくださるゲストスピーカーの毛丹青先生をご紹介します。毛丹青先生は，作家として文筆活動を行う傍ら，神戸国際大学で教壇に立ち，教授でいらっしゃいます。日本語による創作活動として，ご自身の日本体験を記した『にっぽん虫の眼紀行』などの著

書を発表し，日本の仏教書である『歎異抄』を中国語に訳し，上梓しています。日本を紹介する雑誌『知日』，日本を知るといふ雑誌の創刊を，中国と日本の双方でかかわり，昨年6月雑誌『在日本』（日本において）を上海で創刊し，編集長を務めていらっしゃいます。日中間における文化交流のかけ橋になるべく，「相手を理解する第一歩は，相手を知ることから」の重要性を，次世代にみずからの実践で伝え教えてくださっています。

本日の講演のテーマは「日常を知らずして相手は理解できない」です。では，毛先生，どうぞよろしくお祈いします。

日常を知らずして相手は理解できない —日本文化専門誌を通じた文化交流の試み—

毛 丹青

毛 ただいまご紹介にあずかりました、私、毛という者でございます。

今日は朝、始発電車で神戸から参りました。寒かったものですから、東京に入ってきますとだんだん暖かくなってきたような気がしましたので、なぜか、今さっき、この格好で来る直前にまだ寒気を感じました。どういうことだったのかはよくわからない。しかし、このように日本を書くし、あるいは大学で学生諸君と出会うということ自体が、私の日常そのものであります。私が、今年ちょうど日本で30年住んでおりまして、人生の半分以上、日本で過ごすことになります。こればかりではなくて、今現在、日本と中国を往来しながら、文化そのもの、それから日常の暮らしといったようなところに着眼し、文化活動を続けていくというようなことを大きな背景といたしましてお話を聞いていただければ幸いに思います。

今日のテーマは「日常」という言葉を一つのキーワードとしてぜひ理解をしていただきたい。なぜ、日常というものを言わなければならないかという、世の中では、日常から離れていた話が多過ぎるからです。政治情勢やら国際情勢やら、あるいは大きな話ばかりにわれわれは目を奪われていく、今の時世の中では、振り返りで足元から見ていく方がいいのではないかというのを、ここで強調したいと思っています。

今日は関連資料を配ってありますが、あくまでもご参考ということで話を聞いていただきます。通常、私は授業も教務担当しているんですけども、基本的にはこの手のような、PPTですか、パワーポイントなんかは使いたくないタイプなんです。しかし、限られている時間なので、どうやって伝

えるのかという簡単なものを作らせていただきました。今日は、前半に少し理論的な話をさせていただいて、それから、この7年間何をやってきたかということ映像と、それから少しの動画もありますので、プレゼンテーションさしていただくということにしたいと思っています。

まず、第1番めの画像を見てください。これは今から2年ほど前だったと思うんだけど、私がテレビに提供したビッグデータそのものである。注意して見ていただきたいのは、2005年と2014年、10年というスパンがありまして、どのような変化が起きてしまったかということ、2005年のときに、アメリカの日本の貿易との数字ですけれども、日本にとってはアメリカ第一ということと、それから10年近くを過ぎますと今度は中国が第1番めに踊り出していたというデータです。

最も注目してほしいのは、数字そのものです。2005年のときにアメリカは約21兆円になってます。しかし、2014年のときに中国が何と32兆円になっています。昨年度2016年度、日本にとっての中国との貿易の数字が3,000億ドル、約36兆円になっています。これはいわゆるビッグデータというものです。しかし、過去の10年間の間では、日中関係はかつてないほど悪かったという時期もありました。領土問題やら、それから歴史認識といったようなもの。しかし、経済はあたかもそういった騒ぎを知らなかったかのように、前に前に進んでいったということになります。

もう一つの数字があります。今年ちょうど日本と中国の外交回復45年の節目の年になりますが、今思えば1972年その当時中国人と日本人のお互いの往来という数字があります。その数字がどれぐ

らいなのかというと、双方がお互いに行ったり来たりする数字と今現在はどうなってるかということになるんですが、1972年のときには約9万人というデータが出ます。昨年度どれぐらいなのか、900万人です。1,000倍になります。このころは多分、日常生活の中には気づかされてるかもわかりませんが、大きな荷物を持ってバスに乗っていく中国人の個人観光客がどんどんふえてきているという数字が、それを物語っています。わずか40年、引いては45年の間にはこれだけの数字が変わりつつあるというのは、まずわれわれは認識しなければなりません。

はい、次の画像を見ていきます。これは官公庁ですね、発表した数字です。黄色とブルーという二つを分けて見ていただきます。何を見ていただきたいのかというと、日本の方が外国に出かけていく数字と、外国の方が日本にやってくる数字です。この数字自体が、最近の2年、3年というのが見事に反転されていました。というのは、日本から外に出る日本の方の数字が、明らかに外から日本を訪れてくる外国人より少なくなっています。この数字がこれからどんどんふえていきます。

この統計というのは2003年からスタートをしたといいます。なぜ2003年でスタートした統計なのかというと、小泉政権のときには観光立国という大きな看板を上げたその年です。その当時、世界に行く日本の方は約1,300万の人がいました。しかし、外国から日本にやってきた人は、わずか500万ちょいぐらいにすぎませんでした。しかし、今度は、後ろの方に見ていただきます、10年間をスパンにしましょう。2013年のときには、このときに既にもう1,000万、倍になってきます。倍になったどころか、その2年後の2015年のときには、もう2,000万近くになっています。最新のデータを示していたかのように、今年も外国人が日本にやってくる頭の数というのは、既に1,000万を超えてしまいました。ちなみに、2,000万人の中には中国本土、台湾と香港を除いて本土からの人が約640万人を示してます。640万人という数字がどれぐらいの数字なのかというと、これは日本から

外に行く人の、その上の方に見ていただきますように1,600万人というふうになっています。だから、その半分以上を示しているというような数字になります。このデータというのは、ビッグデータは今現在、社会学の中では極めて重要なものです。データは、うそは言わない。このデータを示したものを、まさしく、われわれは、これから日本と中国の双方の発展につながっていくことになるのではないかと考えています。

次のページを見てください。これは、私の授業は実際は全部、手書きなんです。あまり写真なんかを使いたくないんですけれど、私が書いた「影響する文化現象への可視化」ということになります。これだけの人の往来になっていきますとどのような現象が起きてしまうかという絵をごらんいただきます。これが海の、海面と海底を想像してみてください。海面の方は、いわゆるわれわれが見える文化というものになります。見える文化とは何かというと、観光客がやってきます、バスに乗って買い物に出かけています、でっかいリュックサックを持って、かばんも持ってくる、これは全部われわれの目に映ってるものなんです。しかし、こういった見える文化の下に、海底の方なんです。海底の方の交流というのは、実際は目で見えないんです。それが見えない文化とは何かというと、理念、道徳、規範、宗教、人間への思いです。いわゆる目に映ってきたようなイメージをそのまま、みんな一人一人違うイメージを持って行くというようなことです。しかし、海面と海底が必ず離れているようなものではありません。見事につながっています。その離れて無意識の中には、例えば上と下の方、ここで見ていきますと、いわゆる島があったりして、外から見てたら島のようになります。しかし、島の下には大陸に全部つながっていきます。これはいわゆる影響する文化現象なんです。

というのは、今、約600万人以上が中国から日本を訪れてきます。彼らが持ち帰ったのは決して炊飯器、ウォッシュレットの便器というものではありません。持ち帰ったのは、日本へのイメージ

そのものです。そのイメージを、口コミを通じて広がっていくということになります。そのイメージとは何かというと、決して美しい風景ではありません。それは、下の方に書いてあるように、共通する理念、道徳、規範と言ったようなものです。今は、ソーシャルメディアに動画が盛んにアップされています。一つの動画が、日本のとある田舎のところに、交差点のところで車がとめて、小学生がそこをてくてくと歩いていきます。それで、みんながドライバーに対してお辞儀をするという姿です。わずか10秒間のとても短い動画なのに、アップされるとたちまち何億以上のアクセスが殺到していた。これは、いわゆる見えない文化のものでした。

次を見ていきましょう。もう一つに変化が起きたのは、日本に対する見方の構図が変わってきます。今現在が、今現在と言ったら10年ほど前までに言いましょ。われわれは、中国では反日教育とは言わない。それは愛国教育と言います。日本のメディアでは、ごそつと持ち上げて言ったら反日教育というふうに言われます。ここで反日をあえて使うことにいたしましょ。反日の姿のメディアの構図はどうなっていくかということ、マスメディアというものがあまして、このマスメディアは、実際は中央政府によって制御されているものです。

そうしますと、ぶら下げていきますと、例えば取材の姿勢があります。必ずと言っていいぐらいあります。例えばこの人に対する取材があつてはいい、あの人はだめだというようなことが細かく決められていきます。それから、読者、ネットユーザーというものも、それも全部カテゴリーとしては分別をされていきます。直系型と言いましょ。直系型というのは、メディアの今までと同様、昔のようなままでは変わってはいません。しかし、後で紹介しますが、10年ほど前までの状況でした。その以降には何が変化が起きたかということ、知日型のメディアの構図です。ここは、マスメディアのかわりにソーシャルメディアという言葉を使わせていただきます。ソーシャルメディア

の大きな特徴は、一方通行ではなくなります。双方向になってきます。双方向になってきますとどのようなことになっていきますかということ、全てのネットユーザーが同じフラットで、共同で、一方通行の配信じゃなくて、お互いに情報を共有するような、その舞台のような装置になってしまいます。だから、日本を知るという構図が大きく転換をしていました。今までは上から、いわゆる降りてきた、あるいは指定されていたようなものを今度、自分の武器になって、他人同士の間には一つのメディア、ゲームみたいなものを当てます。

次の図式を見てください。このようなことになります。例えば上から、ソーシャルメディアにおいて日本コンテンツを特化するものがたくさんあります。おりてきます。皆さんも多分、今の台所なんかは水を、モジュールというものありまして、水をきれいにする装置になります。そこにかけますと、水が流れてきますといろんな装置が自動的に働きます。それがきれいにしていきます。そういうふうに、今あえてA+B+C+ってということが、これどういうことかということ、Aは一個人、Bは一個人、Cは一個人、しかし、この個人による発散する情報がプラスということに表現しています。情報はおりてきます。このA、B、C、この3人がお互いに情報をシェアし始めています。情報は変化しています。情報は情報のもとに戻らないです。この変化というものがどのような変化なのかということ、話題になったり、あるいは冗句になったり、突っ込み合ったり、ぼけ合ったりして、そういう日常の中に変化をされていきます。

ここにちょっとまとめに書いてあるんですけども、今までは直系型というものをモジュール、構造に変化しています。モジュールとは何かということ、フィルターみたいなもんです。無駄になるような情報は解け離れていきます。人の関心を引きつけるような情報は、今度は残っていきます。デジタルの時代というか、ボトルネイトっていうのは個人のアテンションに移っていきます。アテンションとは何かということ、注意を払うか、払わないかということになります。

もう一つは、第三者の間の相互作用というのを動かす基盤というのは、提供するのプラットフォームのこのような形態なんです。後で紹介しますが、今から7年ほど前、北京で中国の若者たちと一緒に作った冊子が典型的なパターンです。われわれが作った雑誌というものは、これが深読みするためのものではありません。これは、ある種のここに書いてあるような、プラットフォームの話題を提供しています。この一つの冊子を手にして、これ、どれぐらいの話題性になっていくかを、直接売り上げがどれぐらいになるかをみていくんです。かつてない現象です。

最後に、完全な知識というものは、もうなくなってしまいます。なぜならば、情報というものは、本来なら、情報として生きていかなければならないけれども、しかし、この情報は完全に解体され、変形されていきます。そうしますと、何が変わっていくかという、お互いの知識を交換する場所そのものになってきます。この知識は、他ではなく日本についての知識、お互いに変化をしていきます。

ここまでは理論的な話を紹介しました。それでは、実際この6、7年の間には何をしてきたかを見てみましょう。これは2011年、雑誌です。今現在47冊ぐらいいは作ってきました。これは、助成金あるいは企業のスポンサーなどは一切ない実売で、中国で売っていたというものです。創刊は立ち上げ、それから、2015年の12月まで、約5年間は私が主筆を務めました。この間41冊を出して、300万部以上を売り飛ばしていたんです。しかし、2011年、関連資料の中にも書いてあるんだけど、この年は日中関係が一番時期が悪かったということもありました。漁船衝突があって、それから、中国では日本の大使館の前には反日デモが勃発していた時期でした。しかし、われわれが、これこそがチャンスだと逆手を取ったんです。正直言いますと、私を含めて中国の若者たちがこの雑誌を作る大きな理由というのは、決して日中友好のためではありません。ずばり言います。金もうけの手段なんです。これこそ、今の日中関係が大きく

変えようとしていた瞬間でした。なぜならば人間が買い物するときに、衝動買いが大体7割以上を示している。女性の場合は特に顕著なんです。例えばスカーフを買いに行ったとしたら、なぜか、スカーフを買うのを忘れて、帽子を買って戻ってきたというケースはあります。その場の雰囲気ということです。日本バッシングというのがひどくなっていたときに、悪くもよくも、日本というのが大きな話題になっていたということを、ビジネスチャンスの好機だとわれわれが捉えて、それを、冒険を始めてる。最初、誰もがここまで売れるとは思いませんでした。しかし、確かに、ここは一つのものが成り立っていたということになります。

次は、一つのドキュメンタリーの予告の動画を見せます。これは2013年だと思うんだけど、MBS（毎日放送）がわれわれの活動を追跡して1本の、1時間のドキュメンタリーを撮りました。そのわずかの2分程度の動画を見せさせていただきます。しばらくお待ちください。

（動画開始）

ナレーション 去年秋、中国全土で起きた反日デモ。しかし、その同じ時期に、中国では、日本の文化を専門に紹介する雑誌『知日』が売り上げ1位を記録していました。『知日』の主筆は、在日中国人作家の毛丹青さんです。

毛 反日デモがあれだけ起きていた結果は、『知日』みたいな動きがそこで生まれてきたというのか、作り出されていたかもわかりません。

ナレーション この夏、毛さんは中国に一時帰国しました。上海ブックフェアでは雑誌『知日』のPRのため、講演とサイン会を行いました。中国の反日ムードはどこに行ったのかというぐらいの盛況、人気ぶりです。

毛 この『知日』という動きというのは、今は小さいかもわかりませんが、これからどんどん大き

くなっていくというのは、この上海ブックフェアを通して、そういうパワーを感じるんですね。

ナレーション 北京では、古い友人でノーベル賞作家の莫言さんとも会いました。

莫言 毛先生のような人がもっとふえてほしいし、だんだん多くなってほしいと思います。両国間の関係を和らげ、よい作用をもたらすと思います。

ナレーション 日中関係が冷え込む中、ありのままの日本の姿を中国に伝えようとする作家毛さんの日々を追いました。

(動画終了)

毛 はい。それでは、引き続いて見ていただきましょう。『知日』が、やがて、5年間でこのようなことでありましたけれども、それが若者たちにお任せをいたしまして、私が北京から離れて上海で、今度は昨年度『在日本』、日本にいるというコンセプトで立ち上げました。これはなぜこういうことをしたかという、日本を知るという時代がもうわずか5年間で私の心の中でもう終わったと思う。なぜならば、好奇心いっぱい、われわれの好奇心を満たしてくれるような存在ではありません。日本の中に入ろう。これだけの中国の観光客が日本にやってきますと、今度は非常に細かく、きめ細かく見ようとしているという、それを満たすためには、やはり違った分野で活躍しなければいけません。『知日』を作った当初、私以外の全員が日本語をしゃべれません。なおかつ、日本に来たこともない。よくもそういうことをやると、今そういうことを考えていたんだけど、しかし、『在日本』というコンセプトは全て、日本での留学経験を持つ、あるいは日本で今現在勉強をしている留学生諸君の総合的な力を発揮しようという、こういうことになっていきます。

メディアの反応はどうでしょうか。これは、2番めのときにはわれわれはVRっていう、いわゆ

る立体の3Dのような映像なんですけれども、これ、いち早く日本の鉄道を、VRの特殊な撮影で実行しました。

これはイメージです。われわれは学生諸君を起用して、日本各地にこのようなカメラを背負って歩いていきます。その学生にももちろん経費を出しますけれども、学生に宿題を出していきます。例えば最近、今、冬ですから、石川県に白峰村という、かた豆腐を作るという100歳ぐらいのおじいさんを知ってるんですが、学生に「そこを目指して行きなさい」と言って、カメラを背負って激写をします。この方がどのようにして、かた豆腐を作るようにしたか、彼の人生がどのような物語があったのかというようなことを、いわば日本の方ですら気づかされていない世界にわれわれが突っ込んでいくという、これがイメージ図です。

日本の反応は非常に大きかった、中国も含めて。これは「ニュースウォッチ9」の大越さん、降板される一月前、私と一緒に北京で『知日』の報道をしました。それから「国際報道」の有馬さん、今現在「ニュースウォッチ9」のメインキャスターですけど、これ生出演で、中国でなぜこういう雑誌が受けられていたのか。このキャスターはとても奇妙な質問を振ってきたんですが、日本はそういう動きが全くないのは残念でした。日本は中国嫌いかと言って、じゃ、逆に中国の日常みたいなものを知ろうとする動きが全く見つかりませんということでした。中国ばかりではありません。

これは中国のCCTVのドキュメンタリーの映像です。最も注目していたのは、テロップです。上のテロップでは、親日でもない、反日でもないという、これは恐らく中国のテレビの中で「反日」という文字が初めて映った瞬間です。下の方に、われわれの努力というものを全面的に紹介されていたというようなことになります。

しかし、これは『知日』を作っている最中に、2013年1月に、そのときには危機感を覚え始めていた。何を覚えていたかという、日本は、日本政府を含めて、それから、私が教職についてるんですけれども、留学生にあんまりにも冷たいんじ

やないかと僕は思い至ったんです。そこで、日本政府あるいは企業に呼びかけていきました。留学生の情報発信を生かせよということになります。なぜ、こういうことにしなければいけないかというと、せっかく勉強して日本にやってきたものですから、それを、できるだけスポンサーになって、日本各地にいわゆる等身大で日常を見てもらいましょう。あまりのメディアに報道されていたような大きな政治なんかと関係なしに、普通の、今言っていたような白峰村の中のおじさんのところも行ってもらおうというようなことで、目線で発信をしようという。これはそもそも、今紹介を申し上げました『在日本』の最初のアイデアでした。実は2013年のときにもう既にそこを気づき始めた。ここまでやっていかないと、中国の読者にとっては日本というイメージが、多分これ以上に受け入れられないと思います。あまりチラシベースで、情報ベースの日本ではなくて、われわれの理解を含めていった日本ということをしなければいけない。

この後は、留学生たちはどのようにしていたかの報道です。これが「おはよう日本」で、未来を作る研究室。私の研究室では、日本の学生と中国人の学生を合体して、日々その議論をしています。これも、大きく報道されたのは、『在日本』のわれわれの努力です。東京でも記者会見をして、上海、北京、相次ぐそういったものをいわゆる、外から見た日本とは何かというようなことを大いに拡散している様子です。

これはその当時、留学生の視点というのはここでお話をさせていただきましたという。留学生は実は中国と日本だけじゃなくて、日本と世界の間の大きな財産だと。あまりにも粗末にし過ぎてるんじゃないかと。ここ、ちょっと辛口ですけれども。今現在、日本の学生は、海外に留学しに行く人の数が年々減ってしまいます。これは危機の状況になってきます。文科省が今焦って補助金、助成金まで出そうじゃないかという機運にもなってきた。そうせざるを得ないということになります。しかし、中国からの留学生がふえるばかりではな

くて、低年齢化になりつつあります。中学生、高校生といった若い勢力が伸びてきていると思います。われわれがそういう雑誌を作っているのをよくわかっています。

これは、朝日新聞の書いた、私の学生です。一つ、エピソードがあるんです。私のゼミ生で李君という、安徽省からの留学生です。彼は私が『知日』を作っている当時から非常に個人的に興味を持ち始めて、何とかこれを事業にしようとしていた。これは朝日新聞の記者が書いたものです。彼は私を、今までやってきたことを学んで、私が今日配布した記事にも書いてあるんだけど、私が一時1年間かけて放浪の旅に出かけたことがあります。日本の各都道府県に行ったことがあります。この学生がつわものなんです、多分、半分以上は車で全部行ってきました。日本で留学して7年ぐらい終えて、2年間の準備期間を経て、今『在日本』という雑誌を立ち上げた、彼は社長です。私のゼミ生です。中国の若者たちが、いわゆるこういった新しいチャンスと一緒に飛び込もうとする勇気を私はたたえたいと思っています。

これがもう一つ、神戸で、教職もそうなんだけど、神戸というのは阪神電車、小さな電鉄ですけども、これは2011年のときに、電鉄沿線の文学シンというものをわれわれ手作りにしました。私が村上春樹の熱烈なファンなので、彼の小説も訳して出版してるんですけども、なぜこの町に住んでたかという、彼は19年間、兵庫県で、西宮ですけども、過ごしてたという経緯があったんです。これは2011年のときにわれわれがもう打って出たんです。阪神電車がたくさん刷って各駅にフリーペーパーとして置いていたんです。もちろん、村上春樹以外には谷崎潤一郎とかいうような文豪の物語でしたんです。なぜ、この電車がそうしようとしたかという、阪神電車というのはかつて、1年間で1億4,000万人の利用者があった記録があります。しかし、残念ながら、過去10年間で約4,000万人が減ってしまった。それが、何とかして人を、この電車を利用するということにわれわれと一緒に話題になっていた。2011年にこういう

ものを出したんです。ところが、今になってようやく、今現在もう7年が過ぎましたけれども、去年、阪神沿線の百貨店、飲み屋さん、それからいろんなところから消費の額がふえてきたという報告がありました。なぜ報告があったかという、個人力を盛んに行われていたからです。普通の中国の観光客は、普通に行って、そこで見て、店に入ってどんどん繁栄していったんです。これは2011年のわれわれの試みをして、7年を過ぎて今結果が出たということになります。

全員留学生です。これは私のゼミ生です。女性です。彼女たちを日本の神社に研修をさせました。これはかつてない体験です。西宮神社のえびすの3日間ということでやります。彼女たちはもう既に卒業して、母親になった何人もいました。この貴重な経験は、かつてないような規模でやろうとしていたのはわれわれの試みでした。この後は日本、上海、上海日本商工クラブという、日本商工会議所の海外最大の組織です。加盟数が約2,400社あります。今年の1月に招へいされて、このような経験をお話しさせていただきました。企業もこういった試みに注目し始めていたということになります。

これは、いわゆる中国からの富裕層の旅行団体というのは、毎年、何回も日本を訪れてきます。単価をズバリ言いましょ。この旅行団が4泊5日、日本円にしたら120万、1人で払うんです。なぜ、彼らはここまで日本にやってきたかということで、これは日本に逆について、じゃ、100万ぐらいを払って中国に4泊5日間行くか。多分、行かないと思う。今もう逆転されています。こういった人たちが日本にやってきて、専門家たちのお話を、耳を傾けて聞くというのはメインの目的です。

これは今書きましたけれども、又吉直樹ですね、初めて中国訪問のときです。今年のです。NHKの「クローズアップ現代」でも取り上げられました。ここで私の手書きで、こういうことがありました。又吉さんが芥川賞を取ったんだけど、今から100年ほど前に芥川龍之介、こういう1節

を書いてある。「だから、私が一身逃げるの苦しさを忘れるような、愉快なことばかりを考えようとした」、こういうふうになってる。日本を離れて芥川さんが昔、彼は毎日新聞の記者の時代に上海に渡っていたんです。いったん日本を離れていた。しかし、彼は運が悪くて、すぐ病気になって入院したんです。だから『上海遊記』の中の話が、上海の悪口ばかりを書いてたんです。100年を経て、又吉という、芸人ですけれども、彼は小説家として、同じように、中国をどう見ていたのかというようなことが、NHKなどで報道されましたが、彼は非常に感銘を受けたと言います。

これは最近の話ですが、中国では昨年の1月から全面的に2人っ子政策というのを打ち出しました。今までが1人っ子政策ですけれども、2人め政策とは何かというと、要は夫婦で2人め産んでもいいよという。今、産婦人科は大変な状況なんです。予約取れない。この計算になってきますと、2人めが許されている、これから6年先に、大都市部では零歳から6歳までの人口が約4,000万人ふえてきます。さらに10年先を考えていきますと、大体9,000万人になってきます。これは、大きな市場が誕生した瞬間です。どのような市場なのかというと、絵本です。児童に読ませる絵本です。これは、私もこういうふうに、これが糸井重里先生の絵本ですけれども、今、多くの絵本作家と手を組んで、われわれはこれから1年間で約100冊の日本の絵本を中国に持っていきこうというふうに考えています。今日の全ての話は、市場ありの話を先頭に考えていただきたい。

これは、北京大学の博士課程ということで、これは去年のものなんです、日本国際交流基金と中国政府で組んで北京大学の博士課程の学生が、これは日本語学科は除外です。日本語学科ではありません。生物学、それから理学、数学、経済学、文学などの学生を募って、それで集中的に講義を受けるということに、私は3年ほど前このプロジェクトに参加させていただきました。今、中国から見た日本というのを、かた苦しい議論じゃなくて、ある種の日常、あるいは、普通の日本はどう

なるかということが続けていきます。今年も2月ぐらいから、3年めになるんですが、来年か、来年2月、また行かなければならない。

これは、日本の私のゼミ生を連れて、上海の三井物産への研修をさせた映像です。なぜこういうふうにしたかという、日本企業は中国で頑張っている姿を日本人の学生に見ていただきたい。日本の報道と全く違った彼らの雄姿を見ていただきたい。しかも、これはフォーマットに変わってきます。研修というのは、私と一緒に行って、5日間というスパンで、説明会と、あとはレポートを提出していただいて、単位として二つ与えるということになります。そうしますと学生が、意欲が湧いてきて、毎年、定員オーバーの状態が続いています。このようにいわゆる足元からスタートして、どうやって日本の学生と中国の留学生とお互いに知り合うのかという、一つの試みです。

これは留学生たちも連れて中国にある日系企業を研修した様子、これがコニカ・ミノルタのメーカーに行った様子です。

これは生出演で「クローズアップ現代」の中で最後に私の言葉で、日本と中国は暮らしの中に、それから日常の中に何が重要なのかという、まさしくここに書いてあるように、人は人と会う、

人は人を知る、人は人を使う、全てそこに尽きません。

最後に2分間の映像をどうしても見せたいと思うんです。作った人は93年生まれ、日本語を全くしゃべれない、日本に来たこともない人、広東省の人ですけれども、われわれと一緒に一つの映像を作りました。われわれが高野山への旅をしました。その様子をぜひご覧ください。

(映像)

毛 はい、最後の映像になりましたが、とても静かにすばらしい映像だと思います。これは日本の日常を知ったからです。しかも、この時間というものは、とまったままになっています。最後の映像は生身供といいまして、空海大師が1,200年ほど前、高野山で、今なお皆さんは彼は生きていることを信じているからです。想像してみてください。93年生まれの中国の若者です。彼はなぜ、激しく動いている中国の社会を見ずに、静かな日本を求めて来たのでしょうか。この映像は、中国で高く評価されています。これこそ、私が今まで皆さんに申し上げました、日本の日常へのアプローチそのものでした。ご清聴ありがとうございました。

コメンテーター

井上 久士 教授（法学部）

長尾 建 准教授（現代文化学部）

司会

葉 紅 准教授（グローバル教育センター）

司会 毛先生、貴重なお話ありがとうございました。政治的な関係から言えば、この10年、15年は、日中間はむしろ悪い状況が続き、日中間の関係が悪化し続けてきています。その中で実は文化の交流はこういった規模でこういった形でさまざまに行われていたことは、ご来場の皆さんも毛先生のお話を伺っていろいろと広い視野でイメージされたのではないのでしょうか。私たちは、日本で暮らしていると、中国からただたくさんの観光客が電気製品やら化粧品やらを買って帰るとい現象だけに目は奪われがちですけれども、実は彼らが持ち帰ったのは、心に刻みつけた、ただ日本の美しい風景だけではなく、ただ豊かな商品があふれる社会があるというだけではないです。彼らが持ち帰ったのは、日本の文化を知るきっかけだと思うんですね。そういった中で今日の話、大変貴重に私も興味深く拝聴させていただきました。ここから先は、コメンテーターのお二人の先生方からの発言をよろしくお願いします。

井上 毛先生、貴重な大変興味深いお話どうもありがとうございました。毛丹青先生は作家であるし、もちろん大学教授でいらっしゃるわけですが、まず感心するのは、大変行動力がありであるという点です。単に研究室の中で本を読んだり書いたりするだけでなく、社会に飛び出して、あるいは学生を連れ出していろいろとはたらきかけていく。そこは本当に、私などではとてもできないことで、感心いたします。

そのようなエネルギーの元になっているのは、多分、先生の場合、日本に対するリスペクト、それから、旺盛な知的好奇心がベースにあると思う

んですね。一方、日本では、中国の人々、中国の社会に対し、そうしたリスペクトや知的好奇心を持って臨んでいるのかということ、そここのところは、どうもおぼつかないというふうに感じました。

日本の場合、マスメディアの多くはむしろ、中国のひどい大気汚染であるとか、偽ブランドだとか、どっちかという否定的な側面をよく報道して、反面、こんなにすごい日本だとか、世界に誇れる日本みたいなことをやって、自分で自分を慰めている、そういう感じがするんですね。そこからは共感をともなった相互理解は生まれてこない。だから、日本の中で、日本人がそういう知的好奇心を持って、世界に関心を持ち、そして相手に対する、理解とリスペクトができるかどうか、われわれ日本の課題ではないかという気がします。

例えば日本には四季があって、温泉もあつたり、とてもすばらしい、こんな美しい国はないと言いますが、例えば砂漠だけの国であったとしても、そこに住んでる人にとって見れば、それはかけがえのないふるさとだったりするわけです。風景だとか自然だとかっていうのは、それぞれいいところがあるわけです。つまり、価値観の、最初におっしゃった多元化とか多様性に対する寛容さ、そうしたことが本当に重要だなということを先生のお話を伺って感じました。

長尾 ちょっとマイクの調子が悪いので、大きい声でしゃべります。毛先生、どうもありがとうございました。井上先生のお考えになったことと何かすごく似たことを僕も考えてしまっていて、そのことは最後の方で述べたいと思います。

これは毛先生もおっしゃっていましたが、まず

メディアに、偏りがある。今、井上先生もおっしゃっていましたね。

僕が大学生のころですから、もうかなり前のことです。そのころに、異文化交流という意味では、僕が大学院生のとき、必ず1年に1人、留学生のティーチングアシスタントとって、勉強を一緒に見てあげる、それを毎年1年間必ずやらなければいけない、そういうのがありました。中国、韓国、インド、それからエジプト、いろいろな国の方とお会いしたんですけども、そういった国々についての情報というのが、あの当時やはりテレビぐらいしかなかった。そうすると、テレビはやっぱりちょっと片寄ってるんですよ。毛先生もおっしゃるとおり、やっぱり日常を知らないとい異文化交流はできないということを感じました。

特にエジプトの子がおもしろかったですね。イスラム教徒だったわけですけども、あるとき、大学の構内を歩いていて、イチオウの葉っぱが黄色くなったとか、そういった木についてのお話を彼にしたんです。「日本では春になると桜が咲いて、秋は柿がなって、モミジが色づいて、冬には葉っぱが落ちるんだ」と、こんなことを言ったら、彼、全然無関心なんです。それで、何でだろうと思って聞いてみたら、彼の国には木という言葉しかないんです。木を日本みたいに幾つもの種類によって分けられないんです。だから、彼にとっては木でしかないから、全て、見るもの全部、木なんです。そういうことが結構おもしろかった。

それとか、彼はイスラム教徒ですから、豚肉を食べないんです。ちょっと悪いイスラム教徒なんです、お酒も飲むし、たばこも吸うんですけども、豚肉だけは食べたことがないと言っていました。あるとき、一緒に勉強して、疲れたからビールでも飲もうかといつて、お店に入りました。それで、先付っていうんですかね、出されたもの、僕も全然気がつかないんですけど、それに豚肉が入ってたんですよ。全く見えない。僕は普通に食べて、彼は一口食べた途端に「汚い」というふうに言ったんです。豚肉はやはり汚いんです。だけど、彼が言うには、豚肉を食べたことないはずなのに、

何で、そこに豚肉が入ってるのか味でわかるのか、僕にはそれよくわかんなかったですね。そんなようなことで、でも、すごくわかり合いました。やっぱり日常で接すること、これがやっぱり異文化交流には非常に重要だと思いました。

あと、今日はインターネットの関係の話が多いのかなと思いました。インターネットで異文化交流ってどういうふうになってるんだろうっていうふうに、ちょっと考えてまして、僕は日本文学と日本文化が一応専門なんです。なので、うちの大学に来る留学生の授業、留学生のための授業を僕は結構持つんです。それで、やっぱり彼らに、どうして日本文化にひかれたのかということを開くんですけども、すると今の世代はインターネット経由でアニメや漫画を見てるんです。それで彼らはひかれてくるということをよく聞きます。

インターネットのおかげというのものもあるんだろうなということと、あと、インターネットといえば、カラオケが最近、外国に発信されているらしく、いろんな国の人が日本の歌をカラオケで歌ってるらしいです。それがもう高じちゃって、あるテレビ番組が外国の歌手で日本のカラオケを歌ってる人を見つけて、うまい人を日本に連れてきて日本のテレビで歌わせる、そういう番組までやっています。あの辺もなかなか、僕としては、日本文化をうまく発信できているのではないかと思います。そういう日本文化を発信して外国の方がいらっしゃる、その姿を見て日本文化を再び僕らが再認識できるという、異文化交流というのはやはりそういうものでもあるなと思いました。

ただ、先ほど井上先生もおっしゃっていたとおり、日本は果たして外国の国の情報をちゃんと受信しているのかというのが問題だと思います。授業でもやはり日本の学生は異文化とか外国を知ることあまり興味を示さないし、先ほど毛先生おっしゃってましたけど、留学に行かないんですよ。もちろん金銭的な面もあるんですけども、やはりちょっとそういう、外国に対する、異文化に対する興味というのが薄れているというか、もとからあまり強くないんでしょうけれども、これから

は、日本文化を発信するのであれば、逆に向こうの文化も受信するという、そういう相互作用が必要だと僕は思いました。以上です。

司会 先生方、ありがとうございます。今のコメントーターのお二方のご発言に対して、毛先生、もし補足がありましたらお願いいたします。

毛 ありがとうございます。今、先生方の話を聞きながら、重ねて話したいという気持ちがあります。

井上先生のお話の通り、僕は間違いなく日本文化へのリスペクトというものは強く持っています。なぜ、こういうふうになったかという、経歴に少し関係があります。30年ほど前、留学生として日本に入ってきたのに、金がなくて勉強を続けられない。そのときに運命的に私の恩師に出会いました。今現在、聖学院大学の理事長で清水正之先生です。この先生は、私を見て、もう日本に来る前に既に北京大学を卒業して、国家公務員の試験を合格し、社会科学院に入ったわけですね。いわば中国のエリート集団の中に入って、私の同期は今、習近平の秘書を務めてるんだけど、毛は日本にやってきた。清水先生は、「君みたいな人間は教室の中にいるべきではない。日本という大きな社会の中に飛び込め」と言った。「金がないよ」と言うと、「金なければ稼げばいい」って言われて、あまりにも無責任な話だったけれど、走り出しましたね。

たまたまゼミ生の中の1人が、カド君っていったけど、魚屋さんの関係があって、僕は魚を売りに行ったんです。昼もなく夜もなく、深夜3時ぐらい魚を売って、出向で築地に半年ぐらいおって、だんだん魚の商売が大きくなって、やがて遠洋漁業になります。僕、会員証を持ってるんですよ。だから、ペール海峡、ケニアに行ったことがあります。そのときに何の魚を取りに行ったかという、バラクータっていうこんなでっかいやつ、サワラと一緒にんだけど、年間で70万トンも取ったんですね。魚屋さんのおやじが、あまり金ないんだ

ど、この人の兄貴がマルハの役員なんですね。大洋漁業ででっかい現金持ってるわけやから。それで僕はもう必死にやってたんですよ。何でかっていったら、金もうけが好きやから。いたって簡単です。その間、日本で、もちろん本を読むなんかはしませんでした。出来高制だったもんですから、だから、要は上がりの10%が自分の給料になるから、年間で何百億を売ってしまうともう億万長者になるという。だから、こういう経歴があったんですよ、僕はね。それ、ずっとやっていって、しかし、あつという間にこの商売は消えてしまった。なぜならば、中国の経済が成長していって、中国の漁民が日本へ売りにたなくなってしまうからです。僕の得意分野は何も、全て失ってしまった。

たまたま神戸にある上場一部の商社が「君はおもしろいから」と言って、「うちはどうですか。出来高制やめましょう」と言って、「平社員になってくれ」って言って、「はい、わかりました」って言ったんです。しかし、こういう文学好きなもんですから、仕事をしててもそわそわして、あまりおもしろくなくて、会社やめたんですね。やめてハローワークにちゃんと行って、半年の最後の給料の7割ぐらいを自分が補てんして持っていて。ハローワークのおばちゃんとはとても親切で、月1回ぐらい必ず面接しに来るんですよ。「あなたみたいな優秀な人材、必ず使い手がありますよ」って言っていましたが、もう知らん顔して自分は車で日本放浪の旅へ行っただけです。

日本語でどうしても本を書きたいと思ったんです。せっかく日本にたくさんに助けられて、恩返ししようと思って、『につぼん虫の眼紀行』っていうのは自分のデビュー作として書いたわけです。当時ちょうど、文藝春秋という会社の前の社長はヒラオ先生とおっしゃいまして、彼は私の家までわざわざ来まして、もう20年ほど前ですよ。私の日本語を見て、彼はこういうことを言った。「君は芥川賞を狙いなさい」っていうのね。「金になんの？」って僕は逆に聞いたら、金ばっかり気になって、「そりゃあまあ、君の努力次第だ」っ

て言ったんですがね。そしたら、言われました、芥川賞は黒幕があるんですよ。あれは実際いろいろ指図が来るんですよ。こういうふう書きなさいって、うるさく言われるんですよ。そしたら、書き上げていて、今度はたまたま中国で、ちょうど2000年前後で出版事業が一気にヒートアップしてたんですね。ちょうど中国がいわゆるオリンピック誘致活動をして世界に広めていって、中国の出版社は「君は日本語を書くのは面倒やから、それはやめなさい。中国語で簡単だろう。俺がベストセラー作ってあげましょう」と言って。「ああ、わかりました」って言って、本当に、ふたあけたら桁が違いますね、やっぱり。中国でどどん本を売っていって。こういう経歴があったんです、要は。もう何ていうか、人ごみの中に、人間の間に成長をしていった。

今度は、じゃあ、中国語で。日本語でも中国語でも描いたのは全て日本だったのが、僕のスタイルなんです。相手のことを知ることは、自分のことを表現するより大事なことです。自分のことはどうでもいい、まず相手のことを知らなければならぬって言う、そういう原点に立って行っただけです。これは、私じゃなくて、日本の皆さんに出会って逆に教えられました。日本人は一手を引くでしょ。お土産を持っていくのに「つまらないものです」と言うんでしょ。中国人だと「つまらないものを俺によくくれるな」って言って、昔の私が人にお土産を上げるときに「これ、すごいんですよ。なかなか手に入らないよ」と言って差し上げるべきなのに、このころはもう完全に変わってしまいました。だから、こういうふうやって、日常の中に日本への尊敬の念みたいなものが生まれていてということになるんです。だから、今の教職になる前には著述業として、会社もあれなんですけれども、いろいろ頑張っていたところに突然大学の方から誘いが来たということは、やっぱり世の中ではちゃんと努力してたら、日本は成熟した社会ですから、ちゃんと見てるんだよというようなことはつくづく思ったんですね。だから、そういうノウハウを今現在は私の学生、

日本中の学生、中国人の留学生も、それを教えるのはテキストではない。やっぱり外に連れ出して現場で生の社会を見せてやるっていうのは、すごく強いわけでありまして。それこそ人を育てるといふようなものだったと思うんですね。

長尾先生のお話もおもしろかったんですが、日常の中で、例えばイスラム教じゃなくても、私の周りにもそういう人たちがいるんですよ。モンゴルの出身の人がいます。彼はバイユンというんだけど、この人は本当に遊牧民で、子供のころから羊を殺すんですね。羊を殺すときに、彼らの風習では、刀を一切使ってはいけないということで、手でやるんですね。だから、何ら違和感がないんです。もう子供のときから、遊牧民族だから、そのままやってきてる。しかし、何かのご縁で私のゼミ生になったんだけど、この間、彼は泣いていたんですね。何で泣いたかっていうと、しばらくぶりに故郷に戻ったら、おやじから羊を殺せと言われたときに、本当に殺すことができなくなってしまったって言うんですね。よっぽど洗脳されたかなというようなことを言ったりして、人間はやっぱり変わっていくものなんですね。日常の中では接していくときに、中国語の言葉の中にはないんだけど、等身大という言葉が僕は一番好きなんですね。あなたと同じ距離で、同じ目線で、同じ空気感を持ちながら、一緒にやってくんじやないかというような。このような精神というものは、今になってとても大事だと思うんですね。

最後に僕は一つの感想があるのは、やはり知ることの落差というものは今は大変ひどくなってきたんですね。片一方で、中国の今の若者たちが日本のことを非常に興味があって、知ろうとしている。しかし、日本の学生が、中国の特にこういう日常のお話を知ろうとしません。あと5年先、10年先を考えてみてください。あなたの前に日本のことをよく知ってる人がいたとしたら、相手のこと何にも知らないといったら、どのような問題が起きるかということ。スティーブ・ジョブズのケースを見てください。なぜ、iPod、iPadみたい

な最強な、そういうものが日本から生まれてこなかったか。これは、知ることへの崩れですね。ソニーという会社があって、盛田という、会社を作った本人ですけれども、盛田さんとは何かというと、日本酒の酒造屋さんの息子なんですよね。日本酒を作ってる家の息子なんです。だから、ソニーっていう電機メーカーと関係ないでしょ。彼はなぜそのようなソニーを、世界をはっと思わせるような企業を育てたかという、自伝書を読んだら全てわかる。彼はある日、ニューヨークに飛んでいった。ニューヨークのある街角で立ち尽くしていた。ずっと人を観察していた。何を見ていたかという、誰がどの時点でラジオを聞くのかというのをずっと見詰めていた。彼がそこで奇抜な発想を思い立ったんです。ウォークマンそのものである。ウォークマンとは何かというと、これが録音機なのに、彼は録音機能を全て殺してしまった。録音をさせません。単なる再生する機能を持たせた。それがウォークマンです。しかし、世界でヒットしたんです。そのような発想です。

彼が大きな尊敬の念を抱いた男がいました。スティーブ・ジョブズその人である。彼は盛田さんのこういうやり方っていうのは、世間の常識を覆すような発想が好きだということでありました。スティーブ・ジョブズが何を考えていたかという、彼は、きめ細かく日本の中小企業を全部行ってたんです。いわゆるタッチパネルというものは日本人しか作れないということ信じ込んで、細かく見に行ってたんです。たくさんの機械が日本にやってきた。しかし、同じように、彼のような人間は、あるいは盛田さんのような人間が今の日本にいるかどうかは疑問です。いなかったから、知ることへの崩れが始まった。外を知らないっていうことは自分が、結局は幻滅になってしまった。日本はなぜ失われたっていうと、知ることへの意欲が昔ほど強くはなくなったということ、この1点に尽きます。知るということは、どれだけ自分の想像力を豊かにできたのか、どれだけの前足を展望できたのかを今われわれはここで再確認し反省すべきだと思っています。

現在、中国の若者たちが自力で、これは商売でもない、しかし事実モデルとして成り立ってきています。『知日』や『在日本』というような雑誌が、そして同じような雑誌が中国で10社以上あります。わずか7年の間で。すごい戦国時代の競争に入ってきた。それを競い合って、日本のことを日本人以上に知ろうとする、ある種の社会運動まで起きてしまった。日本人は外には行きたがらない。コンビニがあればそこで全てができるというような発想は、やめた方がいいと思う。これからの時代が、われわれを待ってくれない。このような危機の状態というものになっていたのを、今70年代あるいはソニーの全盛期の時代をもう一度振り返ってみた方が、僕はいいと思います。スティーブ・ジョブズのような人間は、将来、日本から必ず生まれてきます。生まれてきた瞬間に知のレベルは回復され、そういったものになっていくのではないかと僕は思っています。

最後に、今の話、僕は気がついたけど、一つ数字が間違っていました。1972年の日本と中国の人的往来は9,000人しかなかったんです。去年が900万人、だから1,000倍ということになります。以上、ありがとうございました。

司会 あと5分ほど時間がありますので、もしフロアの皆さんの方から何かお聞きになりたいことがありましたら、ぜひひとつお願いします。めったにないチャンスですので、どうぞ挙手をなさってください。

A いいですか。

司会 はい、お願いします。

A 『知日』ですね、大変立派な業績を上げたんじゃないかというふうに拝読いたしました。おやめになったということで、その後の『在日本』ですね、これがその後どのような経過をたどっているのか、そしてなにか、先生はどのようにそれを発展させていこうと考えておられるのか、

その辺、『在日本』の内容について教えていただけたらと思います。

毛 読んでくださって、ありがとうございます。また、買ってくれて、ありがとうございました。『知日』という、日本を教えるというのを今も続けてやっています。『在日本』というのは新たなラベルで、これは、いわゆる日本の方ですら気づかれていないようなコンテンツをわれわれは持つようにしたいと思っています。例えばピース又吉、彼を初めて中国に連れていったのは、この雑誌の働きでした。普通ならば、今、時の人になっていて、芸人と中国とのかかわりはどう持っていたのかと気づかれていないかもわかりませんが、われわれはそのようなことをやっています。

もう一つが、最近、糸井重里さんですね、「ほぼ日手帳」というのが今大変話題の人になって、彼の会社が上場もしましたし、こういういわゆる日本のメディアですら非常に接近しにくい方々に、われわれが急接近をかけています。今、村上春樹本人と連絡を取り合っています。来年になりますと、8月に今年のノーベル文学賞カズオ・イシグロさん、この方は日本生まれのイギリス人です。しかし、こういうことを言ったら日本の方が驚くかもわかりませんが、彼の小説の中国語版の点数が日本語より多いです。日本は彼の小説が約9本ぐらいいは翻訳されてるんですけども、中国はそれ以上に翻訳されています。早くも彼は、来年の上海ブックフェアで8月13日から23日の間に上海を訪れるということになってまして、私が彼の対談の相手になります。僕は日本にいながら、中国でのそういう日本文化へのアプローチということをやっています。彼との間には何かが、化学反応が起きるのではないかと。いわゆる『在日本』という雑誌は、それを目指そうとしている。いわゆる日本の方にとっても「へえ」と思わせるような企画というのは、ゆっくりとやっています。いい素材がなければ出さなくてもいいぐらいで、非常に高品質なものをうたっています。簡単に言えば『知日』というのは外から見た日本、『在日本』

というのは日本の中から見る日本ということになります。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。もうお一方、もしおられたら。はい、どうぞ。

B 大変興味深いお話をありがとうございました。実は私、2003年から中国で仕事をしてまして、現在もその違う会社で顧問をやっています、年に数回は中国へ行ってる。私も中国人の友達がたくさんいるんですが、例えば私の後輩なんか「中国に転勤になるんだったら会社やめます」というような感じの人が結構いるんですね。先ほどの話もありましたけど、留学する人が日本はどんどん減ってきている。若者が外へ向かっていかないう、内向きになってきている。これの原因はどこにあるというふうに先生はお考えですか。

毛 ありがとうございます。以前からずっと考えていたんですが、多分、生活への満足感というものがあつたのではないのでしょうか。だから、今の生活というのを、もう十分エンジョイできてるんじゃないかと思ってるんですね。焦りがあまりないということでもあります。日本は非常に平和で、中流階級というのは示していると思うんですが、中国の場合は非常に先富的（先に豊かになれる人から豊かになる）なものをやってきて、全然違うわけでもあります。

それから、そう、なぜでしょうか。最後にこういうエピソードがあるんです。私のゼミ生でヒラオ君というのがいて、彼は高知県の出身の子です。実家は農家なんです。大体ピーマンやナスなんかをやっている。卒業して彼はABC-MARTという靴屋さんに内定をもらって就職しに行くというんだけど、お祝いしようと言って、君がこれから大変、大変というか、じゃなくて、ごちそうしたんですね。中国の料理でティーサイシエンというのがあるんですが、ナスとピーマンとが入った料理でごちそうしていたんですね。彼はそれを食べた瞬間からすごく感激して、ナス料理ってこ

んなにおいしくて作られるなんて、本当にもう涙、出るぐらい。その場でABC-MARTの内定取り消して、家に戻ったんです。一生ナス農民になろうとして、今元気にやっています。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。そろそろ時間が参りました。このあたりで打ち切らせていただきます。毛先生、本日はご多忙なスケジュールを押しとお越しくださり、またすばらしい講演を聞か

せてくださり、ありがとうございました。皆様いま一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございます。コメンテーターの先生方、今日ご来場の皆様、お忙しい中ありがとうございました。これにてお開きとさせていただきます。ありがとうございました。

(録音終了)